

第70回 大阪府青少年読書感想文コンクール

小学校高学年の部 特選

◇つないだ声の先の未来 賢明学院小6年 山田みつほさん

「戦争はどうして、元気で、明るくて、いい人ばかり殺していくのだろう。」「こんな戦争なんか一日も早く終わったほうがいい。」戦争に対するかこ先生の悲しみや憤りが詰まったこの本には、小さい頃絵本で親しんだ愛らしいカラスやだるまは出てきません。工場で戦車の部品を作る場面。先生をはじめとする学生たちは、太い絵筆で荒々しく真っ黒に描かれていて、怒りが絵から滲(にじ)み出ていました。学徒動員の号令で踏みにじられた学業への情熱。さらには理不尽に押しつけられる飢え、そしていつ訪れるか分からない死への恐怖。私は先生の体験を受け止めようと、語り部になったつもりで読んでみました。けれどどうしても、感情を乗せて声を出すことができません。私自身の戦争の追体験が目の前に蘇(よみがえ)り、私の胸や喉を締めつけるからでした。

沖縄のひめゆり平和記念館を訪れ、再現された病院壕を覗(のぞ)き込んだ時のことです。足がすくみました。灰(ほの) 暗い洞窟の奥まで続く粗末な二段ベッド。横たわる傷病兵。医療者になることを夢見た女学生たちに自分を重ねると色々な感情が混ざり合い、だんだん視界が滲んで、何も考えられなくなりました。そして今日まで、私は感想を言葉にできずにいます。

戦時中のかこ先生はどうだったのだろう。読み返してみると、落下傘が開かず目の前で悲惨な死を迎えた兵士が“英雄、と報道されることに涙を流し苛(いら)立ちながらも、行動に移す描写はありません。目撃したどの人も、人目を憚(はばか)りながら泣き、黙って手を合わせるばかりです。皆心に蓋をして、深い悲しみをはっきりと声に出せない様子でした。かこ先生の戦争に対する心の叫びは、敗戦後によく、絵や言葉にできたのだと理解しました。

もしかすると絵に込められた先生の怒りは、戦争中に声を出すことができなかつた先生自身にも向けられているのかもしれませんが。不甲斐(ふがい)ない思いを抱えていた私は、救われた気持ちになりました。世の中の不条理なこと、辛(つら)いことに対して、その時は色んな理由で戦うことができなくても、当時の気持ちを後になって声に出していいんだと、勇気ももらったからです。遅すぎることは一つありません。この本は執筆されてから七十年の時を経て出版に至り、私の元に届きました。すぐに何かを変えられなくても、声は決して消えず、必ず誰かの力になる日が来る。私も沖縄のあの時の光景を忘れず、いつか声を上げる役目を果たせる人になれたらと思います。

かこ先生は、敗戦後の様子を「戦争のない秋の美しさが続きました」と結んでいます。淡く澄んだ秋空と風にそよぐコスモス。この景色が戻ってくるまでに、いったいどれだけの人が傷つき、絶望を味わったのでしょうか。そして世界では今も、大切な人や日常が奪われ、悲しみに包まれた空が広がっています。私は最後の一文を、何度もゆっくり声に出して読みました。この秋空が、どうか世界の先まで広がりますようにと、願いを込めて。(「秋」かこさとし／講談社)